

サタンの国

竹ヶ原 政 輝

奨励者紹介[たけがはら・まさてる]

日本キリスト教団高の原教会牧師

同志社大学神学部嘱託講師

そのとき、悪霊に取りつかれて目が見えず口の利けない人が、イエスのところに連れられて来て、イエスがいやされると、ものが言え、目が見えるようになった。群衆は皆驚いて、「この人はダビデの子ではないだろうか」と言った。しかし、ファリサイ派の人々はこれを聞き、「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」と言った。イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。「どんな国でも内輪で争えば、荒れ果ててしまい、どんな町でも家でも、内輪で争えば成り立って行かない。サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんなふうでは、どうしてその国が成り立って行くだろうか。」

(マタイによる福音書 12 章 22—26 節)

修羅の国

私の郷里は九州の福岡なのですが、以前、ネット上で福岡のことが「修羅の国」と呼ばれていると知った時には、なんだか複雑な気分でした。「修羅の国」は『¹北斗の拳』という漫画に出てくる言葉で、私は元ネタが分かるために瞬間的に「懐かしいなあ」というノスタルジックな感情を抱くのと一緒に、クスッと笑えるところがありました。しかし、そのように自分の故郷が評されているということについては、あまり嬉しくはありませんでした。これらの感情が、間をおかずに生じたせいでしょう。なんとも言えない気分になりました。

「修羅の国」というのは、ざっくり言うと「激しい戦いが繰り広げられている土地」ということになります。『北斗の拳』では、その土地が舞台となるシーズンがあるわけですが、福岡のことを「修羅の国」と呼ぶのは、暴力団の抗争が続いて治安が悪いという理由からでした。私が生まれ育ったのは福岡一の繁華街の傍ですが、実際のところ、全く心当たりがないというわけではありません。それにしても、そんなふうに言われているのかと思ったのが数年前のことで、コロナ禍を経て、今はどんな感じなのだろうかと思いを馳せる今日この頃です。

サタンの国

今日の奨励の題は、「サタンの国」としました。「サタンの国」と「修羅の国」—両者は近いもののようにイメージされる方が多いのではないかと思います。実際には、それらはまるで正反対のようです。サタンと言うと、「修羅」より「悪魔」という言葉の方が連想されるのだらうと思います。今日の聖書箇所には「悪霊」という言葉も出てきますが、その「悪霊の頭」がベルゼブルと呼ばれます。ベルゼブルと言えは悪魔の名前と認識されている方も少なくないのですが、今日のところは、「サタン」と「悪霊」と「悪魔」、

これらについて、あまり厳密に区別せずに見ていこうと思います。

今日の聖書箇所で「サタン」という言葉を持ち出されたのはイエスです。「どんな国でも内輪で争えば、荒れ果ててしまい、どんな町でも家でも、内輪で争えば成り立って行かない。サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんなふうでは、どうしてその国が成り立って行くだろうか」と、イエスはおっしゃいました。これは、イエスが悪霊にとりつかれた人からその悪霊を追い出されるのを見ていた人の中に、「悪霊の頭ベルゼブルの力によらなければ、この者は悪霊を追い出せはしない」と言った人があったためでした。「ベルゼブル論争」と呼ばれる今日の箇所ですが、もしかしたらこの箇所の本題ではないのかもしれないイエスの次の言葉が、私は昔から気になっていました。

「どんな国でも内輪で争えば、荒れ果ててしまい、どんな町でも家でも、内輪で争えば成り立って行かない。サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんなふうでは、どうしてその国が成り立って行くだろうか」。

イエスが悪霊にとりつかれた人から悪霊を追い出されると、それを見ていた群衆は「この人こそダビデの子孫に生まれてくると約束された我らが救い主ではないか」と言います。その場にいたのは基本的にユダヤ人で、かれらは自分たちの先祖である古代イスラエル民族の国が存在した頃の伝説的な王であるダビデの家系に生まれてくるといふ救い主を待ち望んでいました。今、目の前で悪霊を追い出しているこの人こそ、その救い主なのではないかと誰かが言い出したのを聞いて、「いや、あいつは悪霊の力で悪霊を追い出しているのだ」と言う人がありました。その発想がはらむ「論理の矛盾」を指摘されるイエスの言葉は、実際にはなにげない一言だったのかもしれませんが。

「どんな国でも内輪で争えば、荒れ果ててしまい、どんな町でも家でも、内輪で争えば成り立って行かない。サタンがサタンを追い出せば、それは内輪もめだ。そんなふうでは、どうしてその国が成り立って行くだろうか」。

しかし、この言葉からずっと思ってきたことが、私にはありました。「サタンの国」というのは、さぞ平和に違いないということ、そして、人間はサタンもしないことをしてしまうんだなということです。

悪魔もしないこと

サタンの国は、さぞかし平和なのでしょう。先ほど言いましたように、「サタン」について今日のところは「悪魔」と同じ意味としてとらえておいて、「悪霊」とも細かい区別をせずに考えていこうと思いますが、イエスが悪霊を追い出したその力は、それら「悪いもの」から来ていると言う人々がいました。それに対しイエスは、「だったら、悪いもの同士内輪もめをしていることになるよね」と言われた。それはとてもおかしいことではないかと暗に問われるイエスの言葉に私は、「悪魔だって内輪もめはしないんだ」と考えました。そして、「人間は、悪魔もしないようなことをしてしまうんだな」と考えざるを得ませんでした。そして、それは奇妙なりアリティをもった発想であるということ、恐らく皆さんもお感じになるはずです。

「修羅の国」と呼ばれるような場所も存在する。その全体を見わたしてみても、互いに相争い傷つけあう、内輪もめの絶えない、そんな人間の世界に対して「サタンの国」はずいぶん平和なのかもしれません。昔、地球人が一致団結することがあるとしたら、宇宙人が攻めてきた時だろうと言われていたのを耳にしたことがありました。人は、「共通の敵」の存在によって結びつけられるという理屈です。確かに、そう

いうことはあるものです。しかし、たとえば新型コロナウイルスを「共通の敵」だとみなして、地球人たちが一致団結できたかと言えば、そうでもない。むしろ、新たな「分断」が生じたと見えるところもある。そしてまた、新しい戦争まで始まってしまった。「サタンの国」の平和には程遠い。それが今の私たち人間の現実だと言わざるを得ないでしょう。

平和の理由

「サタンの国」というものが実際にあって、本当に平和なのだとしたら、それはなぜなのでしょう。多分、あるものが一致しているからなのだと思います。それは、サタン—悪魔たちの行動原理のようなものです。悪魔は何のために人に近づいてくるのかということですが、それは人を神から引き離すためです。神との間に分断をもたらす。そのために悪魔は、サタンは、人に近づきます。そこにある行動原理の一致、これは言い換えれば、悪魔たちは「共通の敵」ならぬ「共通の目的」をもっているということです。なんともオカルト的な物言いになってしまっていますが、古代人の書いた文書である聖書の世界観をベースにした言葉遣いであることをご了解いただきたいと思います。私自身は、黒くてコウモリのような羽根が生えたものが、その辺を飛びまわっていると思っているわけではありません。

聖書にはそういった不可解な存在によって苦しめられる人がさまざまな形で描かれますが、私の考えるところでは、それら人間にとりつくもの、人間に忍び寄るものの目的はその人を苦しめることではありません。苦しめるのは目的ではなく、手段です。人を苦しめることによって神への信頼を失わせる。こんな苦しい思いをするなんて、神はどこにおられるのだ。いや、きっと神などいないに違いない。そんなふうに思わせ、神への信頼をもって生きるということを人にやめさせる。神との間に分断をもたらす。それが悪しきもののたちの目的です。この目的遂行のために、悪魔は忠実です。

このような悪魔に学ぶというと、また変な言い方になってしまいますが、私たちが団結するにも、「共通の目的」というのは確かに有効です。今日の聖書箇所（マタイによる福音書 12 章 28 節）でイエスは、「わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ」と言われました。

神の国

この「神の国」の実現というのが、たとえば聖書が私たちに示している「共通の目的」の一つと言えます。「神の国」の実現というのは、いささか抽象的な感じもありますが、地上に「神の国」を実現するというのは、地上に「平和」を実現することとかなり近いように個人的には感じています。今学期は、チャペル・アワーの統一テーマとしてマタイによる福音書 14 章 27 節が選ばれていましたが、「昨今の世界情勢を鑑みて」ということで、旧約聖書の詩編 34 編 15 節が祈りのテーマとして掲げられています。

「悪を避け、善を行い

平和を尋ね求め、追い求めよ」。

これは、確かに今の私たちに必要な祈りだと思います。しかし、容易ではないとも感じます。そもそも、「平和」について誰もが同じイメージをもっているとは限りませんし、それを実現する手段についてもさまざまな立場があるはずで、それは、人間が「人格」というものをもっている以上、仕方のないことなのか

もしれません。けれど、この「人格」こそ、神が人間にお与えになった尊いものであるというのもまた真実でしょう。

神は、この「人格」を備えた人間のあり様というのを大事にしておられるのだと思います。イエスが悪霊を追いつ出したのは、悪霊の頭の力による。そのように考えることができたのも、人格をもつがゆえでしょう。イエスを見て、神の子と見ることもできれば、悪魔の仲間と見ることもできる。ここには、人が「人格」をもつ存在であることを尊重される神の姿勢が見られるように、私には思えます。それは、最初の人間アダムをお造りになった時から一貫したものであるようです。エデンの園の中央にある木の実を食べてはいけないという約束を、神はアダムと交わされた。この時、アダムは約束を破れないようには造られてはいませんでした。神は、あくまで人格をもった人間としてアダムが約束を守るということをお求めになりました。結果、アダムは約束を守れず、罪に堕ちてしまうわけですが、しかし、神はその後の人類の歴史を共に歩んでくださいました。そして、御子イエスを通し、私たちに進むべき道を示されました。

神がこうと思われる道しか選ぶことのできない私たちであったなら、むしろ楽だろうと思うことがあります。しかし、それは神の御心ではないわけです。そこにある神の御心を畏れつつ、神が尊重してくださる私たちの「人格」を私たちもお互いに尊重しながら、あきらめることなく平和を、「神の国」の実現を追い求めていきたいと思います。

〔注〕

1 原作 武論尊 漫画 原哲夫 集英社 1983年—1988年 『週刊少年ジャンプ』連載。

2022年7月 27 日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録